

# 19世紀前半のアメリカ聾教育における 手話法について(Ⅰ)

上 野 益 雄

## はじめに

1830年代より起った一般初等教育への関心の高まりと共に、ろう哑施設にあっても、一方には、慈善施設としての性格を保ちながらも、教育施設としての体制がととのえられていった。1840年代に入ると言語指導の面では指文字をも含めた手話法に関する議論がなされていた。しかしそれとは別に、Horace Mann (1796—1859), S. G. Howe (1801—1876) に代表される新しい理念をもつ教育運動が起り、従来からの聖職者たちを中心とする教育観——ろう哑者の心に観念 (idea) をうえつけ、神の存在を知らしめるという教育観——に大いに影響を与えていた。やがて、S. G. Howe, G. G. Hubbard らの口話法によるろう教育施設の設定運動が一応の成果を修め、それは19世紀後半から20世紀前半を通じてのろう教育の主流となっていくことになる。<sup>1)</sup>

一般に、アメリカのろう教育において、初期の50年間は (Hartford 校設立の1817年より Clark 校設立の1867年までと考えてよい) 手話法による教育 (instruction) の時代とみなされている。さらに、歴史的には、手話法から口話法への発展的移行という観点からとらえられてきた。<sup>2)</sup> そこでは、手話法については、今まで何ら明らかにされてこなかった。手話法は、古い、時代おくれのものという考え方が、口話法を中心とする教育理念を基盤として働いていたからであると考えられる。言い換えれば、手話法は、単に隔離の方策、慈善的性格というラベルと結びつけられて、手話自体、言語ではないとして、否定され、攻撃されつづけてきたのである。筆者はろう教育の発展を手話法から口話法への移行という図式でとらえる従来のとらえ方は、適切ではないと考える。<sup>3)</sup> 口話法は、現代のろう教育の発展の象徴であり、ろう教育が、普通教育と肩を並べる資格を外見上だけでも持ちえたその成果のシンボルであった。しかし、象徴が、現

実と異なることはいうまでもない。もし教育が、外面的 (制度的) な成果のみでなく、同時に内面的 (実質的) 成果をも伴わねばならないとするならば、過去の教育方法について、その事実をみていく必要があると考える。

以上の問題意識に立って、本論文では、(1)アメリカにおける施設の手話法についての原則的な考え方を明らかにすること。(2)次いで、手話法の中のいくつかの論争点問題とされた点を明らかにすること、

以上の点2についてみることを目的とする。

## 1. 当時のろう教育の動向

1830年代より高まりをみせた Common School 設立運動は、H. Mann の運動に代表される如く、市民としての自覚をもった社会人を育成することを目的とした。H. Mann は、彼の教育の中に、工場労働に従事する子弟のみならず、あらゆる施設収容者をも、その射程距離に入れていた。<sup>4)</sup> 1843年の H. Mann のヨーロッパにおけるろう教育に関する報告書<sup>5)</sup> および彼の協力者 S. G. Howe の主張<sup>6)</sup>、特にドイツで行われているろう教育の方法 (口話法) の推奨は、従来の施設側にも大きな影響を与えた。アメリカにおける主導的位置をもつろう哑施設である Hartford 校および New York 校とも、その設立当初の意図は、イギリスにおける発音によるろう哑教育の方法の導入であったが、実際には、当時のろう教育の目的から、手話による指導がなされていた<sup>7)</sup>。すなわち、宗教教育と道徳教育を受けることを第一の目的にし、言語指導の面では、書きことばの習熟に主眼がおかれていた。

T. H. Gallaudet と L. Clerc によって導入されたフランス的方法的サインは、アメリカの施設にあって変容し、Natural Sign, Methodical Sign, Colloquial Sign, Conventional Sign, Arbitrary Sign, Alphabetic Sign, General Sign, 等の様々の用語によって、教育者たち

の個々の主張が、用語の適切な定義づけのなされないうままに種々の議論が展開されていた。そこでの主要な問題は、言語と思考の問題、いいかえれば、書記文字と手話の問題、手話と観念の問題がからみ合い、入りこんで提出されていた。

一般に、施設への就学年令のおそいこと、さまざまな理由で、修業年限の短いこと、障害の程度・能力・家庭環境の多様な収容者がいたことなどの理由で、必ずしも教育の成果は、満足なものとはいえなかった。しかし、指導者たちは、博愛の心をもち、収容生徒には規律的な指導をなし、他の貧民施設などと異なり、教育的な性格をもった施設であった。この教育施設の指導者たちは、それ故、彼らの言語指導法に決して満足していなかった。いつかすぐれたよりよい指導法が、発見されるにちがいないという切実な願いがあった。Luzerne Rae は、次のように言っている。「……新しい教育が、おそかれ早かれ、工夫されるだろう。古いものに対する大いなる改善は、偏見をもってみられるかも知れない。ろう啞教育の最も重要なもの——書記言語——について、(その指導法は)今は全く不完全であるが、何らかの方法がかくされており、将来は明らかにされよう。より優れた方法を見出すためには、お互いの誤まりをうち破って、協力せねばならない」<sup>9)</sup>と。

一方には、普通初等教育への関心の高まりとあわせて、施設にも、教育の成果を求める気持ちが大きく、他方には、Articulation(発音)によって指導する方法の波がよせていた。しかしArticulationのみによる方法は、長い経験をもつ指導者たちを納得させるものではなく、方法として何ら優れたものでないと見抜いていた<sup>9)</sup>。Articulationによる方法は、全く別の教育理念に立っていたのである。

## 2. 手話法の基本的教育理念

手話法による指導法の中では、すでに述べた如く、さまざまな考え方が論じられていたのであるが、Articulationによる方法に対しては、それが不十分であり、ろう者に適する何らかの補助手段によって言語を獲得させようとすることでは一致していた。Articulationによる方法と、Signによる方法と、どちらがろう啞者の教育にとってより適するかという議論は、後のClark校設立に際して激しく論争されることであるが、問題は、同一の基盤上に立った論争ではなく、どちらが言語学習にとってより効果的かといういみでのよりよいものであ

るかという問題ではなかった。教育方法は、その時代の時代精神を反映するものであり、社会観・教育観・言語観についての見方の違いを微妙に反映しており、それは教育の目的についての論争であり、教育理念のちがいに由来のものであった。いいかえれば、最初的前提がちがったところから出発していることによるものであったといえる。

それ故、H. Mann, S. G. Howe らが、新鮮な驚きをもって見聞したドイツの教育方法と、その同じものが、同じく欧州視察に行った、L. Weld (Hartford 校), G. E. Day (New York 校) にあっては、何ら感銘を与えるものでなく、何ら新しい意味をもたらさなかったのである。前者の1844年につづいて、1851年の、H. P. Peet の欧州視察の結果も、1859年の再度の G. E. Day の視察結果も、ろう教育における言語指導の成果をどうみるかという点については、それ程変わりはないのである<sup>10)</sup>。H. Mann は、実際に、ろう児の教育のデモンストレーションを行い、S. G. Howe は、パーキンス校にろう啞児を引き受けた。ヨーロッパろう教育に関する報告書ならびにArticulationを奨めるH. Mannの考え方に対する、施設側の冷淡な態度に、H. Mannは怒りをいだいたが、施設側の指導者たちにとっては、新しいArticulationによる方法をおしすすめようとするものたちの考え方である「一般の社会に入るためには、ろう啞者に、社会で通用する音声言語を得させることのみが、必要欠くべからざることである」とは考えなかった。もしそうであるなら、ろう啞者が、音声言語獲得に失敗する場合、それらろう啞者にとっての救済はあり得ないことになるのであり、現実には、音声言語の獲得の困難であるろう啞者の多いことを知っていたし、Articulationによる方法は、昔から行われていた方法であって、何ら目新しいことではなかったのである。

C. Stone は、次のように言っている。「Articulationを求める感情は、①この方法で約束されると思われる結果への極端な願望が起ることであり、②『遠くにあるものは、魅力的である』如く、想像によって事実以上のことが、多くの人々に真実の力となったことである」<sup>11)</sup>と。ろう啞者にとって、音声を用いる以外の何らかの方法は、絶対に必要であり、何割かのものは、音声言語による方法が、有効であるとは認めても、施設という公的教育機関の場においては、多くのろう啞者にとって現実的でなく、時間と労力を要することであるとして、指導の主要な手段としなかった。L. Weld は、「ドイツにおいて成

功しているろう学校は、多くの希望者の中から、わずかな人数しか入学することを許されてはいない」と述べ、G. E. Day は、「毎日の勤めであるべき礼拝と宗教々育は、ドイツではおろそかにされている」と述べている。さらに、「音声言語を用いての宗教々育では、生徒に何がわかろうか。神についてのことが、ろう児に対してどれだけ理解させられるだろうか」と報告している<sup>12)</sup>。施設の指導者たちは、「まず音声言語を与えよ、それが思考活動の基本である」とは考えなかった。

T. H. Gallaudet と L. Clerc によってもたらされた R. A. C. Sicard の方法は、厄介で複雑であったため徐々にくずれていき、教育とコミュニケーションの手段として自然的サインというものに多く依存するようになった。さらにこの自然的サインの乱用と書きことばの獲得の不十分さへの反省から、自然的サインに対する批判が起りその擁護と排除をめぐる議論が行われ、また方法的サインについての考え方のちがいを含みながら、方法的サインの採用についての議論もなされた。C. Stone は、ろう啞教育を成功させるための目的を定め、「ろう啞児に、知識を与えるため、彼の心に近づく手段を得なければならない。そして、彼のまわりの世界との自由な、容易なコミュニケーション手段を与えねばならない」<sup>13)</sup>としている。Sign を用いる方法による原則は、次のようであったと言えよう。

そう啞児の教育の初期においては、殊に、自然的サインが必要であり、宗教的・道徳的に白紙のものに、自然にそなわっているジュスチャーを用いて、すでに経験によって簡単な事柄を理解している心に観念をうえつけることであった。その上に立って、生徒の思考力を身につけさせ、観念を高めるために、音の聞えないものに Sign は、欠かせないものであった。その際の Sign は、どのようなものであるかについての議論はあったにせよ、Sign の必要性については一致があった。知識を開けるには、言語の役割が非常に大きい。その言語の意味するものを Sign で説明するか、もしくは、言語を Sign で表わすかのいずれかの原則に立っていた<sup>14)</sup>。いいかえれば、いずれにしても、先ず、観念を与えることが第一であり、すべてのろう啞児が、自然のまま身につけている身振り言語を用い、その上に教えるべき事柄の観念を築きあげていこうとした。無教育のまま、家庭からも一般社会からも、のけものにされたろう啞児は、精神的に白紙であったが、自然の恩恵による、自然的身振り、表情によって最初の知識の受け入れる入口をそなえている

とした。

フランスの方法的サインから自然的サインへと重点が移り、さらに言語教育におけるサインの使用については、いくつかの議論を引きおこし、自然的サインへの批判が起ったが、如何にしたら書記言語を正しく習得させるべく用いられるかという問題に力点が移っていった。C. Stone, J. A. Jacobs, L. Weld, L. Lae, H. P. Peet 等すべてこの問題に取りこんでいた。そこでは、サインによる魂の教育と、母国語による言語運用力の問題をどのように調和的に矛盾なく教えるかということに問題があった。しかし当時の状況にあって、Articulation の指導がすべての基礎になるという考え方は、承認できず、Articulation による教育をすすめる、コミュニケーションの手段にすることは、非現実的で容認できるものではなかった。それ故、指導法の発展という形で Articulation への移行を導びいたものではなかった。

では、次に、個々の指導者が具体的には、どのような方法を考え、主張していたか、ここでは、主として自然的サインに重点をおいた C. Stone と、方法的サインに重点をおいた L. Weld を中心にとりあげてみることにする。

### 3. C. Stone による主張

彼は、ろう啞の教育については、Hartford 校の設立に最初から関係した T. H. Gallaudet と考え方を同じくしていた<sup>15)</sup>。彼は、De l'Epee によって考案された方法的サインに反対して次のように述べている。「すべて最初から完全であったものは、何も無い。原理の適用、教材、方法、技術の規則は、最初は理論的なものであって、その真の価値は、ただ豊かな経験によって試されねばならない」<sup>16)</sup>と。つまり、De l'Epee の方法は、理論的なものであって、現実の実践においては、修正されるべきだとした。その理論は、「語 (words) は、観念を表わす記号であり、各々の語は、それ自身きめられたサインによって表わされている。ろう教育の過程は、これらのサインを学習することであり、それを学んで語に移しかえそのことによってすべての言語の複雑さをマスターする」というものである。さらに、Sicard は、その方法的サインのシステムを、さらに完全なものにすることに専念し、言語におけるすべての語は、固定したサインによって表わされるべきだとした。このような、方法的サインに対しては、言語教育の手段として反対せざるをえないし、その効用については、より反対の立場をとった。

Stone は以下にその理由を述べている<sup>17)</sup>。

①方法的サインは、語 (words) を表わすものであって、観念 (idea) を示すものではない。

方法的サインは、それが代用する特別な語によってのみ正しく移しかえられうる。自然的サインとは根本的にちがう。すなわち、多くの語が集まって示している意味——一般的観念——を自然的サインは表わす、また慣習的サインもそのような観念を表わすのであって、単一の語を示すものではない。例えば語 must を示すサインは、慣習的なものであって方法的サインではない。それは語を表わすのみならず、obligation, necessity, duty といった一般的観念を示すからである。

②方法的サインは、文字 (letters) のある結合としての単なる語を示すだけである。

この方法的サインでは、語が伝える観念を示さない<sup>18)</sup>。言語は、個々の語の集まりではなく、お互いに関連し合った語からなる。方法的サインでは、語の意味をきめて、説明しようとするものではなく、単に語それ自身を表わし、呼び起すものである。生徒は、言語の各語のサインを学び、特殊なサインが、ある数の文字を表わし、ある順序からなるということ学ぶ。しかし、サインによって生徒が、語の意味の正しさ、語の意味のすべての観念を知りうるかということは、方法的サインでは望めない。方法的サインでは、建築のための材料を集めたのみで、形をきめていくガイドがないのである。

③方法的サインは、会話に不適當である。

それは、会話のためには、あまりに技巧的で固く、実際には使われない。ただ使われるのは書取りぐらいである。しかしこれは単にひきうつすものであり、意味はないのである。語の代わりにサインを使っているだけで、覚えるかも知れないが、理解されない。文法的手話で得たものは、勿論観念ではない。生徒は意味をほとんど知らず、ラテン語か、スペイン語と同じようなものである。

④文法的サインは、語の意味を誤らせる。

われわれの言語では、同義語が、非常に多くあることである。それらは、交換可能で、意味上の差は少ない。例えば、diminish と lessen, hasten と expedite, help と assist, compel と force, complete と finish など、ふつうの用法では、同じ意味を伝える。それらのちがいがもしあるとすれば、用法においてというよりむしろ、語源から引き出されたある影、いろあいにおいていみが異なるだけである。

⑤同じ語が、ちがった意味をもつ。

たいていの語がそうであるが、同じ語が、ちがった意味をもつことである。同じ語が、全くちがった意味で用いられる時、方法的サインは、真の意味をつかむのに邪魔になる。例えば、bear という語は、bear pain, bear a burden, words bear a meaning, trees bear fruit など、語が、ちがった意味で用いられる時、方法的サインは、真の意味を生徒に伝えるのに、大きな障壁となる。さらに句においては、より理解が困難となる。語は通常の用法での意味とことなり、反対の意味にさえる。方法的サインでは、句に使われる時語とサインとがぎまわっているならば、おかしなことになる。to run the risk of の句を書き取らせるとき、生徒には、その意味は何もないのと同じである。

⑥方法的サインの学習には、時間と労力を要する。

語の正字法を学ぶように、それ以上にも、学力は必要とされる。

以上のように Stone は、方法的サインに対して批判をし、観念をろう啞者に得させ、サインによって意味を伝えようとするには、自然的サインがよいとしている。彼にあっては、先ず、ろう啞者の心と直接ふれ合うことが大切であった。これは、アメリカろう教育初期の理念と合致するところであった。ろう啞者が正しく言語を用いる能力を獲得するのは、構文の規則を習得することによってであると述べ、主語の位置、目的語の位置、動詞形容詞等、の位置を教え、モデル文によって示し、生徒が自分で、応用できるよう一般原則を示すことが必要であるとされた。彼は、ろう啞者の魂の教育・心の教育と、文章をよみ、作る教育とを分けて考えたと言える。

#### 4. L. Weld による主張

彼は、先ず、「すべての言語は、聴覚を視覚のどちらかの感覚に伝えられた Sign の集合と考えられる。勿論、ろう啞者では視覚に伝えられたもので一般に language of signs と 言われる」と述べ、それらの Signs には、種々あが、4つのタイプにわけている。①指文字 (Alphabetic Signs) ②厳密な自然的サイン (Strictly Natnral Signs) ③方法的サイン (Methodical Signs) ④慣習的サイン (Conventional Signs) である。この中で方法的サインの重要性を強調し、最初に受け入れた方法を思い起すべきだとしている<sup>19)</sup>。

厳密な意味での自然的サインは、欠くことのできない非常に大切なものであって、特に、幼児にあっては、自然なものであるばかりか、教育のあるものにあっても使

われるものである。指導の初期に欠かせないことは、誰しも異議のないことであろう。

方法的サインは、語の教授に際して、変形を許さない自然的サインを含むが、これは、すべての状況の下において本質的に同じように作られるべきものである。このサインには、多くの下位区分がある。

時間の区分 : today, yesterday, to-morrow, etc  
 時間の副詞 : always, never, now, hereafter, etc  
 人間関係 : father, mother, son, daughter,  
 情意 : love, sorrow, fear, grief, joy,  
 代名詞, 前置詞, 接続詞 :  
 一般的同義語 :

多くの名詞・動詞・形容詞を含む書記言語の語根

学校では、これらは、格、時制、級、などのすべての変化が与えられるべきである。生徒は、このようなサインによって、スピーチと同じように快適な用法となるとした<sup>20)</sup>。

頭の弱いものにとっては、コミュニケーションの方法は、理解し易いものを用いるべきであり、ジェスチャー表情、さまざまな動作が、自然に用いられてよい。ろう啞児は、誰でも、教育を受けない健聴のもの以上に、豊かな適切な表現のできる観念をもつものである。だからその上に立って方法的サインは築きあげることができるとした<sup>21)</sup>。

L. Weld の方法的サインは、厳密なものでなく、自然的サインの用法を多く取り入れていた。彼は、truth, virtue, benevolence といった抽象語をただ単に教えるのではなく、その意味を状況にあわせ、動作やジェスチャーの感情をまじえて説明する方法をとった。さらに宗教的知識・教義においても、その説明には自然的サインを用いた<sup>22)</sup>。彼においては、この自然的サインも、最後には方法的サインに行くべきもので、広い意味で方法的サインに属することであった。例えば、imprisoning という語も昔は、「人を木にしばりつける」サインが用いられたし、また「地面におさえつける、あるいは、荒々しい兵士がとりかこむ」といったサインであったが、今は「堅固な部屋、もしくは牢に閉じこめる」というサインが適当であって、これは方法的サインに入るものだとしていた。このサインは、夫々の教師によって異なるであろうが、多くの教師が、教室では、一致するようになることが必要だとしている。こう言ったサインを含めて、本来の、文法の規則、文章構文の法則、書記言語のモデルとしての語によって文章を作っていく書きとりの法則と

いうものに進めることにした。たえず練習することによって、生徒は、機械的な暗記でなく、意味を把握した上で、指文字の自由な使用、自然的ジェスチャーであれ、方法的サインであれ、使いこなせるようにすべきであって、正しい論理的な文章をマスターできるにちがいないとした<sup>23)</sup>。

L. Weld にあっては、自然的サイン、方法的サインの規定もあいまいな面があり、このことは、その他、J. A. Burnet, W. W. Turner, J. Carlin 等においても程度のちがいはあれ、みられることである。L. Rae は、次のように言っている。サインは、重要な価値があり、ろう教育になくてはならないことは一致していることである。しかし、「われわれは、同じサインを用いる中で、意見を異にしている。ろう教育の技術は、まだ比較的新らしいもので、すでに完全なものに到達したと考えてはならない」とし、「現在言えることは、あまりに多く、あまりに長くつづけてサインを使いすぎていること、そして指文字と書きことばが無視されていること、これはアメリカのろう教育において大きな誤りである」<sup>24)</sup>と述べている。

## ま と め

19世紀前半における、くわしくは1850年代までの、アメリカのろう啞施設における、教育方法は、Sign を手段とするものであった。教育の目的は、魂の成長を第一にめざしており、ついで言語指導は、書きことばの習得が大切であるという主張が生じた。ともあれ、知識への入口は、音声言語ではなく、Sign において開かれていた。社会との交流は、書きことばを意図しており、その中には議論もあり、Sign の種類によって、どのようにそれを使うかに矛盾もあり、新しい方法を求める願いも強かったが、音声言語を用いることが社会へのパスポートであったとした口話法の理念は、現実的でないと確信していた。

次に、C. Stone は、方法的サインが、単なる語を表わすものであり、自然的サインこそが観念を表わすものであるとした。彼においては、方法的サインは、形だけのものであり、意味を生徒に知らせ、生きた知識となるには、不十分であるとした。これに対して、L. Weld は自然的サインの必要を認めながらも、方法的サインこそが、ろう教育にあっては、最も重要なもので、自然的サインもこの方法的サインによってはじめて生きたものになるとした。この方法的サインは、殊に教室の指導では

欠かせず、コミュニケーションの手段としても必要である。すなわち、このサインは、各語に対応するもので、文法の規則、構文、の習得に役立ち、抽象的知識の理解読書、作文に欠かせない。それは、自然的なものに基づけられ、よい判断をもったものによる正しい使用がなされるべきであるとした。ここにおいて、自然的サインは、指導の手段として必要であるが、一般の人々の言語に合致していないことから、これのみを長く使うことを批判した。

アメリカのろう教育方法において、自然的サインについての批判が生じ、同時にフランスからの導入期の方法的サインにおいても、理論的な面があまりに強く、実際的でないことから方法的サインも従来のものでなく、変化をするのである。T.H.Gallaudet に代表されるサインによる宗教的・道徳的教育理念から、社会に通用する、書きことばを中心とした、知識を授ける教育へと変化しつつある時代であった。一般の普通初等教育の広がりにつれて、ろう教育にあってもその教育方法は大きな影響を受けていたといえる。

なお方法的サインについてのさらにつっこんだ議論は、当時の代表的指導者、H.P.Peet および、J.A.Jacobs の論争をみていくことによって、その理論的根拠、問題を明らかにする必要があるが、このことは次の課題とする。

#### 註

- 1) 1867年マサチューセッツ州に Clark Institution が設立されたことをさす。
- 2) わが国においても、ろう教育の指導者川本宇之介、橋村徳一らは、口話法が最終的に最もよい方法として、歴史的にも発展してきたととらえている。その他、R.Bender, H.Best らも、口話法への発展とみている。しかし、現在ここ数十年の間にアメリカではトータル・コミュニケーションの名のもとに手話をも取り入れた指導方法が広く用いられるようになってきている。
- 3) 上野益雄：アメリカ聾教育における口話法の成立過程について、東京教育大学教育学部紀要第21巻昭和50年、では、この問題を扱っている。
- 4) H.Mann は、1843年の欧州視察の報告の中で、学校というものの中には、通常の初等教育機関の他に感化院、病院、盲・ろう学校その他の施設をも含めると述べている。
- 5) H. Mann: Annual Reports of the Secretary of the Board of Education, Seventh Report, for 1843. を参照
- 6) Annual Report of the Board of State Charities Massachusetts の第2年報・第3年報において、S.G.Howe はろう教育方法の改善を主張している。
- 7) 上野益雄：アメリカ聾教育におけるマニュアル体制の成立要因、東京教育大学教育学部紀要第20巻、昭和49年においてこの問題を扱っている。
- 8) L.Rae は当時 American Annals of the Deaf and Dumb の編集長であった。以下の文章は、L.Lae: On the proper Use of Signs in the Instruction Amer. Ann. Deaf., Vol. 5, No.1, 1953, p.22 不幸にして、ろう教育のその後の歴史を通じて、彼のいう如く、相対するもの同志誤りを打ち破って協力することには、ならなかった。
- 9) 発音指導は、Hartford 校においても以前から、時間をもうけて、行われていた。また生徒の中には聴力のある生徒もあり、発音によるコミュニケーションをするものもいた。
- 10) 荒川 勇・欧米聾教育通史 pp. 273—375 参照。
- 11) C. Stone: Articulation as a Medium for the Instruction (I), Amer. Ann. Deaf., Vol. II., No. 2, 1849 p. 105.
- 12) C. Stone: Articulation as a Medium for the Instruction (II), Amer. Ann. Deaf., Vol. II., No. 4, 1849 p. 240
- 13) C. Stone: Articulation as a Medium for the Instruction (I), Amer. Ann. Deaf., Vol. II., No. 2, 1849 p. 108.
- 14) 本論文では扱わないが、次に予定される論文において、H. P. Peet, J. A. Jacobs の論争においてはこの問題がくわしく扱われることにならう。
- 15) T.H.Gallaudet は、自然的サインを重視し、宗教教育と道徳教育を中心とする指導において、ろう啞児との心の交流に、最も適したものとしている。
- 16) C.Stone: On the Use of Methodical Signs. Amer Ann. Deaf., Vol. IV., No. 3, 1852, p. 187.
- 17) ibid, pp. 188—192
- 18) De l'Epee: The True Method of Educating the Deaf and Dumb, Confirmed by Long Experience 1860. において彼の教育方法が述べられている。
- 19) L. Weld: Suggestions on Certain Varieties of

19世紀前半のアメリカ聾教育における手話法について(I)

- the Language of Signs. Amer. Ann. Deaf. Vol. V., No. 3, 1852, p. 150.
- 20) *ibid*, pp. 151—152
- 21) *ibid*, p. 152
- 22) *ibid*, p. 153
- 23) *ibid*, p. 156
- 24) L. Rae: On the Proper Use of Signs in the Instruction. Amer. Ann. Deaf. Vol. 5, No. 1, 1953, p. 22

## Résumé

### Manual Method of the Education for the Deaf and Dumb from the 1840's to the 1850's in America.

Masuo Ueno

The purposes of this study are to make clear the thought of the manual method of the Asylums for the Deaf and Dumb in America, and to make clear the point under discussion of the manual method.

At the early period of the education of a deaf-mute, the principles of the Manual Method are as follows.

1. Two objects must be secured. The instructors must obtain ready access to a deaf-mute, to give him knowledge of men and things, and they must supply him with a medium of free and easy intercourse with the world around him and they didn't believe that the method of articulation was indispensable to those objects.

The instructors of asylums were agreed that signs have a place, and a very important place, in the instruction of the deaf and dumb. On this point, at least, there was no difference of opinion among instructors. They insisted that the idea of the oral method wasn't practical and realistic.

2. All instructors had agreement in the general truth that signs must be used, to some extent, in the education of their pupils. But as the author narrowed the field of inquiry, he discovered a wide difference of opinion in respect to the kind of signs which should be employed,

(1) C. Stone advocated the use of Natural Signs. He criticized the use of Methodical Signs. According to his theory, the first objection against Methodical Signs for teaching language was mainly this point: "Methodical Signs represent words, and not ideas". In other words, "Methodical Signs represent the word merely as a certain combination of letters, and not the idea which the word conveys.

(2) L. Weld advocated the use of Methodical Signs. He insisted that methodical Signs were most important for teaching language. He said that Methodical Signs were quite necessary for the establishing of uniform clearness and precision, even in the common conversation of the deaf and dumb, especially important in teaching by means of lectures.

There were other instructors discussing the method of instruction for the deaf and dumb. A dispute between H.P. Peet and J. A. Jacobs will be the task in Author's next study.